

3. 11東日本大震災・原発事故の体験 36

サテライト方式高校はいまどうなっているか

○『クレスコ』2014.3 <3.11から3年・福島からの報告>より転載○

南相馬市原町区(元県立高校教員) 山本富士夫さん(61歳・会員)

政府の使命は最大多数の最大幸福を実現することなのだから、統治者は最小少数の最小不幸を結果として捨象し、少数者に受忍を請う。原発の運転や海外輸出が最大幸福に必要と考えるわが国の政府は、原発事故をなかったことにはできないので、すでに収束したことにし、その不幸は最小だったねと国民が思うように望んでいる。思うつぼにはまったのか、多くの人々は、事故はあったが復興がすすんでいると思っているようだ。

事故で元々の校舎を追われたサテライト方式高校の現状を報告する。最小少数の最小不幸のひとつにすぎないのだろうか。

表 福島の避難した高校の生徒数(2013年4月現在)

高校名	所在地	避難校の 所在地	在籍生徒数				寄宿舎利用		入学生		
			2010年4月	2011年8月	2012年4月	2013年4月	2012年	2013年	2010年	2012年	2013年
① 双葉	双葉町	いわき市	469	198	120	65	49	21	161	16	15
② 浪江	浪江町	本宮市	315	146	76	40	6	3	110	7	14
③ 浪江・津島校	浪江町	二本松市	53	52	44	38	0	0	22	15	15
④ 富岡	富岡町	4カ所	327	227	212	184	20	6	120	52	61
⑤ 双葉翔陽	大熊町	いわき市	341	172	124	75	40	14	121	24	16
⑥ 相馬農業・飯館校	飯館村	福島市	88	79	68	51	6	7	36	21	14
⑦ 小高商業	南相馬市	南相馬市	217	154	129	147	10	7	76	39	70
⑧ 小高工業	南相馬市	南相馬市	588	388	322	286	31	6	200	116	93
避難している8校計			2,398	1,416	1,095	886	162	64	846	290	298
⑨ 原町	2011年秋、南相馬市 原町区の自校に戻る		708	386	451	440	15	7	240	159	148
⑩ 相馬農業			332	228	265	283	0	0	105	113	103
戻った2校計			1,040	614	716	723	15	7	345	272	251
避難した10校計			3,438	2,030	1,811	1,609	177	71	1,191	562	549

(出典)「しんぶん赤旗」2013年7月11日付。

サテライト高校での学校生活

表の生徒数をご覧いただきたい。在籍生徒数2ケタ、入学生徒数20名以下が5校。避難指示区域の3町1村に所在していた高校では、生徒数が激減だ。(富岡高校は、他校に比して生徒数が多い。優秀なスポーツ選手を育成することを主眼とする学校づくりが、その背景にある。サッカーエリートの生徒たちは静岡県にいる。)

避難校所在地がいわき市となっている3校は、同一の建物(大学施設の1棟)を共有している。それぞれの高校ごとのエリアがあり、クラスごとの教室はある。だが、教室数に余裕がないので選択授業はやりにくい。情報・芸術・体育などの授業施設や保健室は共有である。授業は時間差展開できるが、保健室の学校別展開は……できるわけがない。

(裏面へ続く)



事故から逃げ家族と離れ、仮の住宅での生活 心を開いて話せる保健室が共有だなんて

3校の養護教諭と生徒たちが、1つの保健室を共有……って？ 保健室って、強くない（弱くなったときの）高校生の逃げ場だし、先生は秘密を守ってくれるので心を開いて話せる場だ。

サテライト方式高校に集まる生徒たちは、事故のあと、逃亡生活とも呼ぶべき経験をしてきた者が多い。仮の住宅に暮らす者がほとんどであり、家族と離れ「寄宿舍利用」を余儀なくされている者もいる。事故直後は危機であり、パニックだった。あたたかい手をさしのべてくれた人にも出会ったが、世の中にはこんな人いるのか、あの人はこんな人間だったのか、と嫌な思いもした。さまざまな経験をして、心に傷を負った高校生も少なくない。それなのに、いわき市の避難先校舎には、他校の先生や生徒も同席する1つの保健室しかない。保健室が逃げ場になりにくい現状が、この3校にはあるのだ。

部員の減少、部活動低迷は入学生減少へ

避難5校の部活動。間借りしている高校は、避難先の高校と部活動の施設を共有する、ということになる。時間差で対処するなどの調整（遠慮）が要る（一緒に活動するのはめずらしい）。遠慮するのは、部員数の少ない避難校であろうか。部員数が少なくなると活動不調で魅力低下、魅力低下は部員数の減、やがて部活動休止、部活動休止情報は学校の魅力低下、そして入学希望者減少へと負のスパイラルへ。部活動の劣化は覆いがたい。

入学生徒数で、本校より分校が多くなる

最後に、浪江高校の本校と津島校（分校）の

入学生徒数をご覧いただきたい。本校よりも分校のほうが多い。種明かしはこうだ。

本校の学区は双葉郡、分校の学区は全県である。本校に入学できるのは双葉郡出身の避難中学生、分校に入学できるのは、制度上は全県の中学生だが、実際はその学校に通えると判断した中学生である。何が起こったのかというと、津島校が避難した先の二本松市周辺出身の、双葉郡とは無縁の生徒だけが入学したのだ。浪江町ははじめ双葉郡出身者入学生は、2年連続ゼロだ。津島校は、二本松地区での新設高校になったかのようだ。

双葉郡に新しく「中高一貫校」

地域社会が吹っ飛び、存続の危機を迎えている高校はどうなるのか。設置者の県教育委員会は、長期的な方針を示してこなかった。

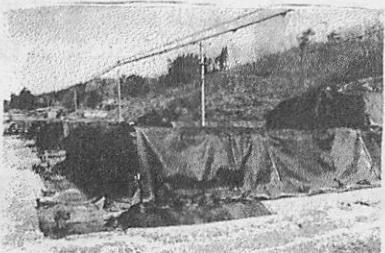
双葉郡の地元から、提案があった。新しい高校をつくろう、と。8町村の教育長で構成する協議会が、県立の中高一貫校新設を柱にした「双葉郡教育復興ビジョン」を公表して文科省に提出、文科省が支援し県教育委員会も協議に加わったのが、去年の夏。新しい高校には、避難した子どもたちの帰還を促し、地域を復興する観点から構想された、特色と魅力のある教育内容をもたせる。協議を続け、2015年度4月に高校が先行して開校することが、12月に決まった。場所は、放射線量の比較的低い双葉郡南部の広野町。サテライト5校については、2014年度を最後に募集停止、2017年度以降は休校にするとしたのである。

先行き不安という不幸は、高校の場でも続く。

（1954年生まれ/やまもと・ふじお）

報告 ぜひ、我が故郷の異常な状況を見に来てください

双葉郡浪江町権現堂（郡山市に避難中）屋中茂夫さん（61歳・会員）



▲阿武隈山中の国道114号線沿いの浪江町津島。無人で荒れ放題、汚染土をつめた黒いフレスコバッグが高く積み上げられたままです。

月1回程度、避難先の郡山市から2時間かけ、浪江町の自宅に国道114線で帰還困難区域の浪江町津島地区を通り、一時帰宅する。4月は農作業が始まる時期だが、だれ一人おらず、荒涼とした風景が広がっている。豊かだった田んぼに、今は柳や杉の木、ケヤキが小指ほどの太さになり、大人の背丈ほどに繁茂している。夏にはセイダカアワダチソウが生え、秋にはそれが黄色く色づく。田畑の土手や家屋敷の周囲はイノシシが至る所を掘り返している。また道端には、除染土の黒いフレスコバッグが高く積み上げられていて、何とも言えない空しい気持ちになる。

浪江町の中心街も、震災から3年を過ぎても手つかずで、倒壊した家屋は放置され、朽ち果てたまま。生活の音も生命の鼓動も聞こえず、我が故郷がゴーストタウンになるなんて、本当に悔しくてならない。

電気の供給を受けていた都会の人々は今、「福島県の人々は復興して、もう普段通りの生活をしている」と思っている方が大勢いるのではない。とんでもない。十数万の避難民のことを考えながら、一度事故原発周辺のこの異常な町や村の状況を見に来てください。「原発再稼働」などとは、とても言えないはず。 （2014年4月18日記・一部のみ紹介）